

2023年10月29日（聖霊降臨後第22主日、特定25、A年）

牧師メッセージ

「何を求めているか」

（マタイによる福音書 23:1-12）

司祭ヨセフ太田信三

今日の福音書は、主イエスが群衆と弟子たちに向けて語りかけている場面です。主イエスはあくまで、「律法学者やファリサイ派の教えはすべて行い、また守りなさい」と教えました。彼らは「モーセの座」にあるからだというのです。モーセの座とは実際にあったもので、飾りのついた石造りの椅子で、会堂の聖書の巻物を収めた箱の近く、壇上に会衆と向かい合うように置いてあったようです。この構図からわかるように、「モーセの座」についているということは、み言葉や律法を教えることを司っていたということで、当時は大変な権威でありました。彼らは正しい側の人間として、人を裁くほどの力までも持っていたのです。当然、その権威は、彼らに基づくものではなく、神によるものです。しかし、彼らは勘違いし、いつの間にかその権威を身にまとい、自分を高く、偉く見せようとするようになりました。彼らは掟について雄弁に語るものの、自分たちはそれを行うことはありませんでした。いや、実際にはそんな彼らでも「行う」時がありました。それは、人に見せるために何かをする時でした。権威の源である神を忘れた彼らは、人々にばかり目がいつているのです。それも、人々の苦しみや悲しみではなく、彼らの目は人々からの喝采や尊敬を身に受けることばかりに注がれてしまっていたのです。だからこそ、主イエスは今日の福音で、いわば「有言不実行」の「彼らの行いは見習ってはならない」と言われるのです。

主イエスはさらに、人々から「先生」とか、「父」とか、「教師」と呼ばれてはならない、と言いました。なぜならそれは、自分の偉さを誇るようにならないためです。自分が神に成り替わり、権威者にならないためです。主イエスは言いました。「あなたがたのうちで一番偉い人は、仕える者になりなさい。」主イエスに従う弟子たちのなかで、一番偉いのは「仕える者」です。だからこそ、神のため、人のためにご自分の命を投げるほどに低みに立たれた主イエスこそが唯一の教師であり、先生です。主イエスの前では、わたしたち皆が等しく神の家族とされます。その主がおられるから、わたしたちは人を拝んだり、誰かを低くするようなことなく、互いを神の家族として、等しく関わり合うことができるのです。もちろん、今日の使徒書のパウロのように、その働きのなかで、時に母親のように、時に父親のように他者と関わるが必要なことがあります。教師や先生として振る舞うが必要なこともあるでしょう。しかしそれは、パウロがそうであったように、人に喜ばれるためではなく、神に喜んでいただくためであり、人間の誉を求めず福音を伝えようとする時だけです。だからこそ、パウロはそのためなら幼子のようにだってなったのです。わたしたちも今日、あらためてこの基本姿勢に立ち返り、ただひたすらに神に喜ばれる道を求めましょう。